



国土と言葉

二

本多弘之

honda hiroyuki

阿弥陀の名号とは、その因位いんに法蔵菩薩の本願がんが名となることよって、衆生に「破闇満願」のはたらきを与えようとするものである。だから、その名となっている言葉に、闇を晴らす光のような意味がある、と呼びかける。したがって、苦悩を感じる衆生が、生活のなかで如来の願を具体的に思い起こし、その

はたらきを感受して、苦悩が破られていく。たちが、名号を称えることなのである。衆生の苦悩の様相や状況に対応して、光が照らし出す闇のあり方が異なっている。それで、如来の光に具体的な種々相を分けて語りかけるものが、十二光として語られる阿弥陀の別名なのであろう。

さて、『浄土論』の「本願力回向」の意味を、如来の大悲が苦悩の衆生をみそなわして、「回向を首しとして大悲心を成就したまう」のだから、如来の願心が名となることこそ、「回向」の具体的ななかたちなのだと思つたのが、親鸞の『教行信証』という著作の構想の出発点であると思う。如来の願いが名をとおして、

人間の資格とか状況とかを超えて、平等の救いを具現しようというのだ、と信受したのである。この名号による平等の救いを現に信受するということ、あなたも外から保証するような言葉が「撰取不捨」であろう。「念仏衆生撰取不捨」（『観無量寿経』）という言葉を「撰取不捨のゆえに阿弥陀と名づ」けるのだ、と善導は押さえた。「撰取」という如来の大悲のはたらきを表す言葉を、「阿弥陀」という名号の意味であると押さえるわけである。そして、この「撰取」という語に「にぐるものをおわえとる」と、親鸞は左訓をつけている。

回向というと、回らし向けて、こちらのものをあちらへ与えるというような感じがあるが、回向によって「大悲心が成就」するのであるから、どのように疑い深い衆生であろうと、逃がすことなく大悲の利益のなかに包み込むのだというのであろう。そもそも、大悲が国土を建立したいということの意味も、実はこういうはたらきを衆生に気づかせるためである、というのが親鸞の気づきだったのである。

生きるものにとって環境とは、それを与えられるから生存のかたちが具体化できているのである。場所があつて、いのちがそれとは別に存在する、というのではない。生命は身体と環境とともに、生きる営みを持続する。環境において、連綿と続く生存の歴史が与え

られているのである。生存を規定する環境が、生存内容を充足するのだ、とさえ言えるであろう。

法蔵願心は、十方衆生を平等に撰取するはたらきを具体化するために「国土」を建立しようと発願した。国土は、人間存在の根源的環境の意味をもつからであらう。生活が成り立っている根底の場所が、国土だからである。場所のかたちを願心の内容として判明にすることによって、衆生を撰取しようとする大悲を、衆生の生存の足場に据えようとするのである。

だから、国土が建立されたなら、その国土を存在の故郷として、それを自己の生存の場所として、選び取ってもらえさえすればよいのである。この世の故郷は、人間の選びに先立って、宿業因縁によつて産み落とされ育てられた場所が、それぞれ一人ひとりの「故郷」となっている。これは「雑業」と言われるような縁であるから、無数の業縁の差違において、無数に異なる場所である。しかし、「故郷」という言葉には、生存の根源の懐かしさともいふべきものが張りついている。それでこの言葉のもつ深層の「帰去来」（いざいなん）の魅力、法蔵願心の建立する国土に込めて、衆生に「この国土に欲生せよ」と呼びかけているのであろう。

仏の名のはたらきに、「撰取不捨」という慈

悲の表現があり、この撰取ということをも具体化するものが、環境的に語られる仏土なのではないか、と考えてきた。親鸞は、浄土の利益とされる「正定聚・不退転」を「現生」に獲得することができることを、浄土真宗の旗印にしているのだが、この「正定聚に住すること」ができることを言うときに、「撰取不捨のゆえに、正定聚のくらしいに住す」と言う。仏陀の智慧のはたらきが、光明として衆生の無明・長夜を照らすのだから、凡愚の愚かさ、を嘆かずともよい、というのである。そして、かならず成仏するという確信を持続できる位たる「正定聚」を、この濁世において獲得するので、という。その場合は、本来、浄土という如来の空間であるべきのだが、その功德をわれらの濁世で獲得できると主張する。その主張を支えるものが、「回向」との値遇なのである。

さらに言えば、回向の中心たる名号との値遇において、本願力のはたらきを身に受けて、浄土という如来を取り巻く空間の力を、この現世において受け取ることができるのだという。本願が成就するという『大無量寿経』の物語の意味を、この濁世に生きている実存の衆生に起こる事実として、衆生の救済が「回向」において成就するというのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）